



みのる法律事務所便り
第372号
令和3年4月



みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒021-0853
岩手県一関市字相去57番地5
TEL：0191-23-8960
FAX：0191-23-8950



い な べ ん だ べ ん く
田舎弁護士の駄弁句 (91)

その通り 六十から 黄金期

働き盛り そうとも言える



令和3(2021)年4月1日
あおぞらうきよのすて
青空浮世乃捨

盛岡市でヨガ教室や健康講演活動など、広く活躍されている畏友松村^{いゆう}論^{ろん}先生の『老後の健康と経済不安』は名著です。

その中に、「『60歳から90歳までが人生の黄金期』を講演のテーマにしておりますが、実はこの30年間は働き盛りでもあるのです。日本の定年退職制度は、病人と貧乏人、つまり不幸な人を増やすだけですから早く廃止するべきです」という件^{くだり}があります。心の底から共鳴します。

60歳で定年退職し、働くことを止め、暇を持って余していたら、人生の黄金期であり、働き盛りである60歳から90歳までを無駄にしてしまいます。もったいなさ過ぎます。60歳までの経験で得た知恵は、その先で活かして使わなければならないのです。

松村先生は、「定年後 犬も嫌がる 5度目の散歩」という川柳^{いや}を文中で紹介しています。酒とカラオケと犬の散歩もたまにはいいでしょうが、犬に嫌われないように、他^{ほか}にもやることを見付けて人生の黄金期を充実した毎日^{まいにち}にしたいものです。

いなべん だべんく
田舎弁護士の駄弁句 ⑨2

いま一度 確認したし 0.8

じつねんれい
実年齢は まだまだ若い



令和3(2021)年4月1日

青空浮世乃捨

「人生100年時代」と言われています。確かに平均寿命は延びていますし、現代の年寄りも、昔と比べ若くなっています。以前、「実年齢は暦年齢の0.8掛(か)けが正しい」と語ったことがあります。それは間違(まちが)ってはいません。

これでいきますと、60歳は「 60×0.8 」で「48歳」となります。90歳は「 90×0.8 」で「72歳」となります。暦年齢の60歳から90歳は実年齢「48歳から72歳」と言うことになります。まさに、働き盛りです。

人生経験を積み重ね、酸(す)いも甘(あま)いもかみ分け、分別(ぶんべつ)が付き、働き盛りとなり、他人(ひと)の役に立てる人生の黄金期(きんごん)です。前句で紹介した松村(まつむら)諭(のり)先生の「60歳から90歳までが人生の黄金期」、「働き盛り」説(せつ)は、的(まと)を射(い)たものなのです。

この人生の黄金期をどのように過ごすかで、楽しい人生となるかどうか決まりそうです。

『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という『いなべんの哲学』を実践するには、この黄金期こそ絶好の期間です。ギアを前向きに入れて、人生の黄金期を楽しみ尽くしましょう。まだまだ若いのです。飼い犬にも相手にされないような生き方は見直しましょう。



新刊書の御案内と謹呈

兄シリーズ
第9話
『内助の功』

兄シリーズは、第8話まで発刊していました。久しぶりに第9話を発刊しました。この事務所便りと一緒に謹呈させて戴きます。

内容は、お読み戴ければ分かることなので申し上げます。『内助の功』を書くに至ったいきさつだけ紹介します。

仙台市で3年のいそ弁（勤務弁護士）生活をなし、独立開業しようとしたのは、30歳を超えたばかりの時でした。始めは仙台市で開業する計画でしたが、いきさつがあり急遽気仙沼市で開業することになりました。

何の準備もしていませんでしたが、事務所が新築できるまで兄の会社の社長室を借りての開業となりました。

気仙沼信用金庫の担当者として、兄の会社に毎日のように出入りしていたのは村上郁雄氏でした。

村上郁雄氏は、中学時代に彼が気仙沼中学校のファーストとして、私は岩手県東磐井郡大東町立大原中学校のピッチャーとして、大船渡沿線野球大会で闘ったことがある仲だったのです。

彼は、私の法律事務所の運営をバックアップしてくれました。第1号の事務員を連れて来てくれたのも彼でした。開所10周年のパーティーも、準備から招待客集め、当日の司会進行までしてくれたのも彼でした。

「気仙沼朗人倶楽部」、通称「老人クラブ」という野球チームを作り、10年近く一緒に楽しみました。ファーストの彼とピッチャーの私のコンビは「あ、うん（阿吽）の呼吸」で隠し球の技を決めるのが最高の楽しみでした。1試合に一つは決めていました。思い出だけで、未だに笑いがこぼれます。

その彼は思ったことは遠慮なく、齒に衣着せず^{は きぬき}に言って来ます。今も昔も変わりません。兄が「いっくちゃんの体調が悪い」と知らせて来たのは、令和2（2020）年の秋でした。私の闘病体験記を彼に送りました。

彼は直ぐに電話をくれました。「俺の病気のことは気にするな。それより、兄シリーズで会長（兄のこと）の奥さんの内助の功の話を早く書け」と言うものでした。

彼は「これまでの兄シリーズでは、会長の奥さんのことが言い足りない。俺は奥さんが会長に勉強を教えていた様子をよく見ている。今の会長があるのは、奥さんのお陰だ。その内助の功を書かなければ、兄シリーズは画竜点睛^{がりょうてんせい}を欠くということになる。俺の病気の心配などしていないで、そのことを書いてくれ」と言うのです。

夫婦のことは、兄弟とは言えよく分からないし、義姉からは「私のことは書かないで」と言われていたので、なかなか手が出せませんでした。しかし、中学校3年から60年以上の付き合いであり、兄弟以上の仲で、大恩もあるいっくさんからの命令^{あね}です。義姉には兄から許し^{いくお}を得てもらうことにして、彼、村上郁雄氏の命令に従うことにしました。

彼のお陰で、兄シリーズ9話『内助の功』が発刊^{なな}出来ました。内容は謹呈させて戴きますので、お時間の許すときに、斜め読みでもして戴ければ幸甚です。

年寄り^かは、昔の楽しかったことを、牛やラクダなどの草食動物が一度飲み込んだ食物を、口に戻して嘔み直す「反芻^{はんすう}」のように思い出して話したり、書いたりして楽しみ直すと、当時よりもっと良い味が出て美味しく味わえることを知りました。これもいっくさんのお陰です。彼に感謝し、新刊書の御案内と謹呈をさせて戴きます。

